明暦の大火と出初式

なぜ、消防は新年早々に出初式を行うのだろう？とズ～～ット疑問に思っていました。

出初式の起源を調べてみると、1657 年の「明暦の大火」に辿り着きました。

皆さんも時代的にピンと来ないと思いますが、

豊臣氏滅亡の「大坂夏の陣」から 42 年、
「島原の乱」から 20 年、
「生類憐みの令」の 30 年前、
「赤穂浪士討ち入り」の 45 年前です。

中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」による「1657 明暦の江戸大火報告書」によりますと、
明暦の大火は、
1 月 18 日 14 時頃の本妙寺（現文京区西片 2 丁目）
19 日 10 時頃の小石川鷹匠町（現文京区小石川 3 丁目）
19 日夜の麹町（現千代田区麹町 3 丁目）
から出火した 3 件の大規模火災の総称であるとしています。

その当時の江戸では前年から 80 日以上も雨が降っておらず非常に乾燥した気象状況にあり火災が多発していました。1 月 17 日から吹きだした風は 18 日には一段と強くなったようです。

最初の火災である本妙寺からの出火原因は、放火又は失火の説があるようですが、「振袖大火」として伝説になっている逸話もあり、いくつかのバリエーションが存在するようです。

ザックリまとめますと、

1652 年 3 月、質屋の一人娘がすれ違った美少年に一目ぼれし深い片思いをします。どこの誰かも分からないまま恋煩いで臥せっている娘の様子を見かねた両親がせめてもの慰めにその人が着ていたのと同じ柄の振袖を作り娘に与えます。

しかし 1655 年 1 月 16 日、16 歳（17 歳の説も有り、以下同じ。）で焦がれ死んでしまいました。葬儀で棺を覆っていた振袖は本妙寺に納められ、住職はいつものことながら古着屋に売ってしまいます。

翌年の同日、別の 16 歳の娘の葬儀があり再びこの振袖が本妙寺に納めされました。それをまた売ると、次の年の同日に、また別の 16 歳の娘の葬儀で三度この振袖が本妙寺に納められました。

振袖にまつわる因縁が恐ろしくなった住職は、1657 年 1 月 18 日に供養の読経をし、その振袖を火に投じます。その時、突然の強風が火の付いた振袖を約 25m の本堂の真上に吹き上げ本堂は炎上し延焼拡大して行きます。

いかにも人々が興味を持つようなお話ですが、事実の真偽は不明のようです。

さて、明暦の大火の被害程度は諸説ありますが、現在の千代田区と中央区のほぼ全域、文京区の約 60%、千代田区に隣接する地域一帯が焼失したと考えられています。「明暦炎上記」によりますと、江戸城は西の丸を除き焼失、大名屋敷 160、旗本屋敷約 810、町人町は 800 町余り、神社仏閣 300 余り、橋 60 余り、倉庫 9000 余り、当時の江戸市街地の 60%を焼失しました。死者数に関しては、「むさしあぶみ」、「本所回向院記」、「山鹿素行年譜」などで 10 万人台、「上杉年譜」、「天享吾妻鑑」、明暦三丁日記」などで３万 7 千人余り、「元延実録」で 6 万 3430 人などとしています。

この大火を経て 1658 年、幕府直轄の新たな消防組織として、定火消が制度化されました。

明暦の大火後の復興作業に苦しんでいた江戸の人々に大きな希望と信頼を与えるため翌年 1659 年 1 月 4 日、老中稲葉正則に率いられた定火消四組が上野東照宮に集結し気勢を上げました。この行動が出初と呼ばれ、以降毎年 1 月 4 日に上野東照宮で定火消による出初が行われるようになり、次第に儀式化しました。

でもちょっと待って。中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」による「1657 明暦の江戸大火報告書」に 1 月 18 日に発生した明暦の大火の発生は「太陽暦では、現在の 3 月 2 日から 3 日」と記載されています。明治維新後、太陰暦を廃止して日本は西暦に変わりましたので、記録の日付のままではないのです。当然、1 月 4 日の定火消の出初も 1 月末から 2 月中旬だったのでしょうね。

360 年以上前から脈々と継続して開催されてきた消防出初式が、地域により多少開催日に違いはありますが、新年早々寒風吹き荒ぶ中全国各地で行われます。

＜参考＞

内閣府防災情報　https://www.bousai.go.jp

出初式の歴史　http://fukuoka.keichiku119.jp

令和５年消防出初式　http://www.khf119-osaka.jp/OSHIRASE/soumuka/20221207shouboudezomesiki.pdf